

北海道文学史

明治編

木原直彦

序章 概説 北海道文学 明治期
第一章 萌芽期 近代文学前史
札幌農学校 北海道事情 アイヌ
取材作 第二章 移植期 国木田
独歩 葛西善蔵 徳富蘆花 島崎
藤村 石川啄木 岩野泡鳴 長田
幹彦 要吉・花袋・雨雀 第二章 揺
籃期 有島武郎とその周辺 文芸
運動の開始 北海道生まれの作家

海道文学史

明治編

木原直彦著

北海道文学史 明治編

昭和五十年四月 一日 第一刷発行

昭和五十年七月二十五日 第二刷発行

定価 八〇〇円

著者 木原直彦

編集 北海道教育委員会

発行者 戸田正彦

発行所 北海道新聞社

札幌市中央区大通西3丁目

印刷 協業組合 高速印刷センター

発刊にあたり

北海道文学に関する調査、研究は、これまでも地道に続けられてきましたが、その成果の出版については種々の困難があり、貴重な資料が散逸しつつあるのが実情であります。北海道教育委員会では、このように貴重な資料をいたずらにうもれさせることなく、これを公にし、研究や教養の資料として役だたせ、また後世に伝える文献とするため本書の刊行を企画しました。

しかし、当委員会の発行部数や配布先が限定されているため、広く一般道民の皆様にも読んでいただける方法を検討しておりましたが、今回、北海道新聞社の協力を得て増刷、発行が実現することになりました。

当委員会の依頼で執筆に当たった北海道文学館の木原直彦氏に感謝するとともに、北海道新聞社による本書の増刷、発行が、本道文化の振興に寄与することを念願して、序といたします。

昭和五十年三月

北海道教育委員会教育長 山本 武

発刊にあたり

北海道教育委員会教育長 山本 武

序 章 概 説

第一節 北海道文学…………… 8

第二節 明治期…………… 12

第一章 萌芽期…………… 23

第一節 近代文学前史…………… 24

1 アイヌ文学…………… 24

2 明治以前…………… 26

3 旧派の文学…………… 31

第二節 札幌農学校…………… 35

1 クラーク精神…………… 35

2 新渡戸稲造と内村鑑三…………… 37

3 農学校出身の文人たち…………… 39

4 夏目漱石の戸籍…………… 43

5 宮本百合子移住…………… 44

6 有島武郎の農学校入学…………… 46

文武会の誕生……………49

第三節 北海道事情……………50

幸田露伴の余市時代……………50

三遊亭円朝「椿説蝦夷なまり」……………55

草創期の新聞……………59

中江兆民と「北門新報」……………63

泉斜汀の記者生活……………66

野口雨情の放浪……………67

星野天知の来遊作、菊池幽芳「乳姉妹」……………71

第四節 アイヌ取材作……………77

幸田露伴「雪紛々」……………77

遅塚麗水「蝦夷大王」……………80

武田仰天子「蝦夷錦」……………84

溪舟・水蔭・雨雀……………86

第二章 移 植 期……………89

第一節 国木田独歩……………90

「空知川の岸边」……………90

佐々城ノブ……………93

「牛肉と馬鈴薯」……………96

第二節 葛西善藏……………98

寿都移住……………98

			「雪をんな」の世界……………	100
		2	「姉を訪ねて」……………	103
		3	徳富蘆花……………	105
		1	「寄生木」……………	105
		2	北海道旅行……………	109
		2	島崎藤村……………	114
		1	「春」と佐藤輔子……………	114
		2	「津軽海峡」と函館……………	117
		1	石川啄木……………	121
		1	第一回渡道……………	121
		2	函館と「紅苜蓿」……………	123
		3	北海道漂泊……………	127
		1	岩野泡鳴……………	131
		1	札幌放浪……………	132
		2	日高・十勝の旅……………	135
		2	長田幹彦……………	139
		1	旅役者時代……………	139
		2	辺境を描く……………	143
		1	要吉―花袋―雨雀……………	145
		1	鳴海要吉の受難……………	145
		2	田山花袋「トコヨゴヨミ」……………	148
		3	秋田雨雀「緑の野」……………	151

第三章 搖籃期……………157

第一節 有島武郎とその周辺……………158

1 農科大学教授時代……………158

2 農科大学の文芸活動……………164

3 武者小路の有島訪問……………167

4 白樺派の人びと——直哉、生馬、諄、春夫、光太郎……………171

第二節 文芸運動の開始……………179

1 青春群像——同人雑誌、投書家たち……………179

2 冷的文芸論……………191

第三節 北海道生まれの作家……………210

1 道産ン子一期生——無想庵、武羅夫、三郎、寛、吉一……………210

2 女流作家の上京——たま、しづ……………229

3 明治から大正へ——栄、多喜二、健作、整、陸男、勝一郎、義徳たち……………236

主要参考文献……………260

北海道文学地図……………266

北海道文学年表（明治編）……………272

索引……………305

あとがき……………306

序
章
概
說

第一節 北海道文学

《北海道文学》なるものが学問として成立するかどうかは、いまは問わない。ただ、この北海道という風土のなかで実に多くの文学が生まれ、育ってきたことはたしかである。この風土に影響を受けて人間形成がなされ、いかにも北海道の特徴を備えた文学が誕生し、日本文学のなかで独特の主張をなしてそれなりの位置を占めた。

いわば近代から始まった北海道の文学は、いわゆる来道文学者の手によって鍛え入れられ、以来、北海道は彼らによってさまざまに描かれてきた。道産ン子の若者たちはその文学に強い刺激を受け、文壇をにらみつつ自立し、文学運動を展開したのであった。

文学は人間・歴史・社会の証言といわれるが、この北海道を基点とし、あるいは触発されて生じた文学《史》をとらまえるとき、北海道なる日本のなかの特殊な一地域で生きた人間の証が鮮明になってくる。日本《文学》の視野からと、日本《文学》への主張という複眼を立脚点とすると、《北海道文学》は正当な位置を持つにちがいない。それは、プラスとマイナスを正確に把握する作業でもあろう。

過去において、先達による《北海道文学史・論》のすぐれた業績がいくつもある。本書はそれらの輝かしい成果をノリとハサミでつなぎ合せようとするものであるが、もとよりその完璧を期しうるところでない。修史の手前の、ありていにいえば《北海道文学史稿》というのが本音である。さらに付け加えると、《近代北海道文学史》ではあるが、詩・短歌・俳句といった短詩型のジャンルを除外したところの、小説・評論中心の文学史なのである。

北海道文学論は和田謹吾「近代文学における地方性の問題―北海道文学の位置」(「ふじ」3号、昭29、3)において確立したが、氏はそこで北海道文学をつぎの四つに分類した。

第一類・単に北海道を舞台にしただけの作品群

第二類・北海道の植民地的な異国情緒を主とする作品群

第三類・北海道の地理的自然環境に育まれた作品群

第四類・北海道の歴史的社会的環境に育まれた作品群

その論考と表裏一体をなすのが「北海道文学の構想」(「原始林」昭29、9、10)だが、この和田四分類説は北海道文学を

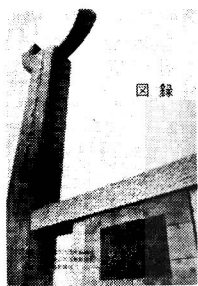


図 録

考えるうえで、その歴史を眺めるうえで基幹となる論考である。北海道文学論は例外なく北海道の置かれている歴史的・地理的条件——日本のなかでも特異な風土を立点として論じられる。そのことは、紛うことなく北海道の文学が日本文学のなかで独特味を持っていることにはかならない。

和辻哲郎は名著「風土」(岩波書店、昭10)のなかで、世界を「モンスーン」「砂漠」「牧場」と三つの類型に区分けした。そして日本をモンスーン型の範疇に入れたが、同じ型でも例えば支那とは異なると論じている。当然といえば当然であり、そのことでは例えばブラクストン・ラインと名付けられた津軽海峡を隔てた北海道は、大枠または広義には日本型であるとしても、しかし日本の湿潤性とはかなりちがう性格を示しており、やはり一種の異風土とみれなくもない。

北海道の文学はそのことを事実として証明しているが、「風土は文学の傾向を決定するか」(「群像」昭31、6)なる共同研究もみておきたい。北海道は東北や北陸とも、内陸的・南方的・内海の性格を有する地方とも違つとし、北海道人の生活意識はきわだっている、とする。その特徴として、開拓者のロマンチズム、伝統を持たぬものとしての劣等感とノスタルジー、原始的な自然に対する神秘的な傾向、不安定な常にさまざまな脅威におびやかされる人間の生命に対する抒情的な理解、これらのものと結びついている放浪性、広大な原野を前にする牧歌性と無限の可能性、をあげる。

さらに、歴史的視野からも日本の伝統に彩られないこの地方の文化の特異な性格として、北海道に生まれ育つた作家には宗教的あるいは神秘的なものと社会主義的(倫理性)なものとの二つの傾向がある、としている。その根底には観念的な態度があつて、このような傾向は自然を対立するもの、人間の秩序の外にあるもの、しかもこれに挑戦しそこに自己の秩序を確立しようとする態度から生まれるというのである。

自然環境と社会的文化的環境は相互依存的に人間に影響を与え、今度は逆にその人間の意識によって文化や産業に影響を与える。ゆえに「風土」は人文地理的概念として用いられるが、その空間的な風土性に時間的な歴史性を重ねるとき、そこに一つの像が鮮明に浮かびあがってくる。前出の和田論考は、有島武郎に端を発した小林多喜二、本庄陸男、島木健作、久保栄といった作家に代表される第四類の傾向が、戦前までの北海道文学に圧倒的であつた、とし、これからの北海道文学は第四類の型式から脱化して、思索型式を育ててゆくところの、国木田独歩が発掘した北方の抒情——伊藤整や八木義徳の文学に伝統として流れている第三類に見出すならこの地の文学はより可能性を持つとしている。

「私は北方の人種に属する。この北方人の血と運命といったやうなものを私は早くから子供心にばんやり感じてゐた。子供の私が感じた北方人の血と運命といふものは、かつて勝利

したことのない、朝にあつて栄えたことのない、いつも野にあつて踏んづけられ通して来たもののそれであった。歴史や地理に関する讀物を讀んでみても、眼につくのは北方のみじめさだった。戦つて敗れた敗残者どもが、あつたかい南の国から追はれ追はれて、半年雪に埋もれてゐる辺土に住みついた、それが自分たちの先祖なのだと思ひ、遠い彼等のことを夢のやうな氣持で考へた。

島木健作「文学的自叙伝」(「新潮」昭12、8)の一節だが、これは北海道的性格を的確に射た言葉である。島木健作は、その思索において最も典型的に北海道の歴史的条件を背負いつづけた作家であつた。山田昭夫は「『悲劇的精神系譜』の探求を」(「北海タイムス」昭35、6、22)で「北海道の文学の可能性が、この悲劇性を認識し、それを超えたところに求められねばならぬ」とするのは、和田説第四類に属する作家たちの文学が北海道の文学伝統の正統であるという認識からきている。

本史においても「北海道文学論」の一項を要するし、本道出身作家の北海道観なりも重要な意味を持つが、いまここには、断片的ながら道産ン子ならぬ諸家の北海道文学考察をいくつか掲げておく。

・福田清人「日本近代文学紀行・北海道」(「日本読書新聞」昭27、7、16)。

原始林や曠野の処女地に胎動する開拓事業の浪漫性や、冷厳なる風土の精神にあこがれて津軽海峡を北へ渡つた内村鑑三、国木田独步、有島武郎、石川啄木、岩野泡鳴らの作家たち。一方、父祖がこの辺境の開拓者として辛苦して築きあげた土地から新しい文学の開拓を決意して逆に南へ向つた中村武羅夫、岡田三郎、小林多喜二、島木健作、亀井勝一郎、寒川光太郎、八木義徳たち。そこに共通するのは濃淡の差こそあれ不屈な開拓者の血や、処女地からかもしだされた浪漫的な性格である。この日本の極北の自然と人生は、あこがれ來つた作家たちにも離れ去つた作家たちにも強くしみとおつてゐる——

・山本健吉「現代文学風土記・北海道の巻」(「群像」昭28、1)。

ピュエリタニズムに代表されるアメリカ的なものとともに、コミュニズムに代表されるロシア的なものの影響はその地理的關係からいつて当然であり、その文学者たちは宗教派と社会主義派である。そして、内地と全く異なつた風土と、伝統の重庄を持たぬ特色が風通しの悪い日本の文壇文学に大膽な新風をもたらしてくれそうであり、北海道の文学は日本の文壇から完全に独立するといひるのである——

・中野重治「北海道の作家たち」(「文学」昭42、2) || 「北海道文学展」開催記念文芸講演会(札幌・道新ホール、昭41、10、25)講演記録。

「北海道からは過去にもいろんな文学者が出ました。今現に働いている人もたくさんあります。そして私は、今私のあげた人

たち（注・プロレタリア作家たち）の仕事をして、その他の北海道の作家たちと仕事とから切りはなして考えることができせん。元来文学とはそういうものなのでもありますが、北海道の文学、北海道の文学者については、特殊にもそういえるかと私は思います。それは、北海道が、その生み育てた北海道の文学者をおして、全体としての日本文学に何を寄与したか、という風に見られるものだと思います。あとで話す伊藤君の仕事なんかも、北海道に関係の浅くなかった宮本百合子の仕事なんかも、また特殊なアイヌの歌人としてのバチエラー八重子の仕事なんかも含めて考え、それから石川啄木そのほかの人なんかも含めて考えますと、それはつまり、日本文学が北海道との交渉のなかに生み出したものということになりませんが、そしていちがいには言えませんが、それは、人間と自然との交渉の最初の姿というものを、たえず顧みさせるもの、こういうものがその中心、その根底にあると私は思います。「思想とかイデオロギーとかいう面でのちがいがありませんから、全体としていって、北海道の文学が人生に正面から相渉ろうとしているという大事なことが出てきているだろうと考えています。その意味で、言葉が通俗的になるのを厭わなければ、大づかみにいって、北海道の文学が人生派的だといつていいと私は思います。遊び、遊戯、せんさいな洒落、それらはそれら自身人生の内容をなすのですから、これを排斥してはならぬだけでなく、そんなことは出来ることでもありません。北海道の生活と文学とは、それを含めてやはり実直に人生に對している。自然にそこから眼が社会というところへ開いてくる。そういうコースを北海道文学は辿っていると私は思います」。

・奥野健男「現代文学風土記」筑摩書房「現代日本文学大系・別冊」昭43、8。

北海道の開拓は日本が近代化に向って踏み出したときからはじまる。その歩みはそのまま日本の近代化の歩みを象徴しており、それ故であろうか、日本の近代文学に与えた北海道の影響は大きく、多くの文学者がこの地にわたり、この地を舞台にした作品を書き、また北海道からも特徴ある文学者が生れた。北海道の文学には、西洋風なエキゾチシズム、新しいものの好きのハイカラ性、進取性、大自然を相手にした雄大性、そしてピューリタニズムにつながる求道精神、真面目さがある。何かそこに北海道の文学系譜には悲劇のかけがえつきまとう――

文学史の形態を整えるためには時代区分を必要とするが、近代日本文学とかかわりなく北海道文学独自の思潮なり運動なり傾向が認められるわけではない。しかし、おおまかにその歩みが日本文学に即応していたと云えなくもないし、ことに、本史のような地方文学史においてはその土地の発展と決定的なかかわりを持つ。本史では明治・大正・昭和（戦前）・昭和（戦後）と四区分して記述するが、この区分は最も妥当と認められよう。

第二節 明治期

近代日本文学が成立したのは、明治も二十年代に入ってからであった。不完全革命といわれる明治維新後の日本は、西洋文明の急速な移植によって歩みをはじめたが、近代文学は坪内逍遙「小説神髓」(松月堂、明18、9、19、4・全九冊)まで待たねばならなかった。この書は近代西欧小説理論の最初の移植であり、同時に逍遙は「一読三歎 当世書生氣質」(晚青堂、明18、6、19、1・全十七冊)を出版したが、これは近代文学の意図による初めての小説であった。ついで二葉亭四迷が近代人の苦悩を追求した「浮雲」第一篇(金港堂、明20、6)を世に問い、近代日本文学の幕は切つて落されたのである。

中村光夫は「現代日本文学史・明治」(筑摩書房「現代日本文学全集」別巻一、昭34、4)で明治の文学を三期に大別している。それを取り入れながらみてゆくと、第一期は維新からほぼ二十一年間で、戯作・戯文の旧時代の延長と、政治・翻訳小説という新時代を形造るものとがまじり合った時代であった。世相の変化が激烈なときで、文学面ではまだ新時代との積極的な取組みはみられず、封建体制なりその思想から脱出することを求めつづけた。それは近代文学を樹立するための過渡期であり、移植・啓蒙期なのであった。

二十年に入ると明治社会はいちおうの安定を示すと同時に、近代思想が成熟し、深化し、あるいは分化していった。その時期はまた明治の青春の始まりでもあって、逍遙、二葉亭を先頭に、尾崎紅葉、幸田露伴、森鷗外といった青年たちが名乗りをあげたのである。これが、第二期であり、近代日本文学のスタートをみたのであった。第三期は、時代の行詰りと閉塞状態を感じとった青年たち、それは自然主義文学も白樺派も耽美派も含めて、彼らは芸術を手段として人生に新しい意味を見出してゆく。四十年代である。

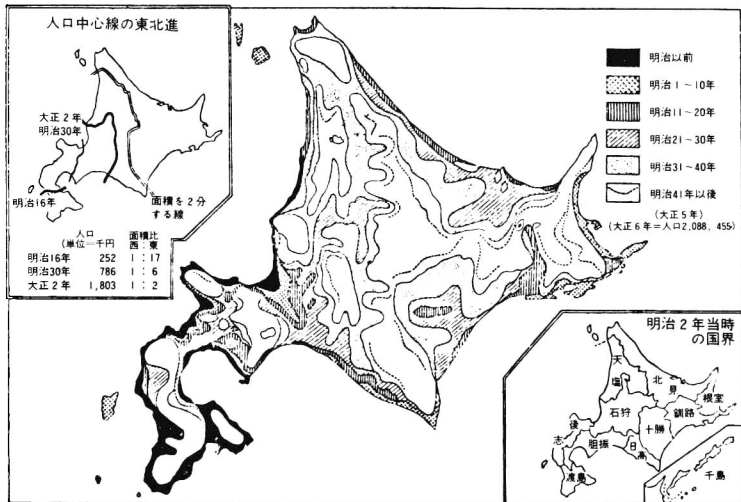
そこで北海道文学の場合であるが、まず近代北海道の始期を確認しておかねばならない。アイヌ民族の地であった蝦夷なる北海道に和人(と表記しておく)が定住し始めたのは明治のかなり以前、西暦一二〇〇年ごろからであるが、明治まではほぼ道南一円にその居住は限られていた。明治政権を樹立した日本政府が北海道に開拓使を設置したのは明治二年(一八六九)七月であり、その八月には松浦武四郎の案によって蝦夷地を北海道と改めた。ここにおいて北海道は明治政権の支配下に置かれたわけだが、明治の声を聞いたときの和人人口は約六万人(一万二千戸)にすぎなかったの

である。

以来、北海道は資源開発と北方警備を二大柱に、積極的な移民政策によって成長していったが、やはり近代北海道の始点をここに求めるのが妥当であろう。官員、神官、僧侶、乞食、土族、屯田兵、囚人、土工夫、結社、農漁民、商人といったふうに全国各地からの移民は実に多様な流れをみせ、それぞれの地に根をおろしてゆくが、明治十四年(一八八一)までに北海道に本籍を移したのは七万三千余といわれ、実人口にしても二十四万人でしかなかった。

広大な厳寒未開の原始林にいとむ彼ら——生きることで精一杯な彼らにとつて、文学どころではなかった。心の糧として文学を渴望していたにしても、そんな余裕などなかったのである。北辺視察による旅人たちの紀行記も、官員たちによる和歌も、それはいわゆるごく少数の知識人たちの手にあつたわけだし、明治前に道南に定着していた庶民の文学である俳句にしてもその北上は遅々たるもので、まして農漁民など労働階級にとつては西欧文化(近代精神)の摂取の雰囲気さえみられず、近代文学の波などまだ遠い世界にあつた。

しかし一方では有島武郎にみられるような札幌農学校における文化の醸成や、新聞による啓蒙、北海道事情の報告文などによってつぎの時代への準備をなしていったのである。更にもう一つの例をあげてみると、明治十八年(一八八五)に島流しの心境でいまだ作家以前の幸田露伴(19歳)が来道(全市)したが、その二年余の孤独な生活こそ露伴文学の雌伏時代であつた。文学的生涯はそこから始まつたが、この来道が機縁で「突貫紀行」(明20)と「雪紛々」(明22)を生むこととなる。また、明治十九年に来道して「蝦夷錦古郷之家土産」(明19)と「椿説蝦夷なまり」(明26)をものした落語家三遊亭円朝やアイヌ

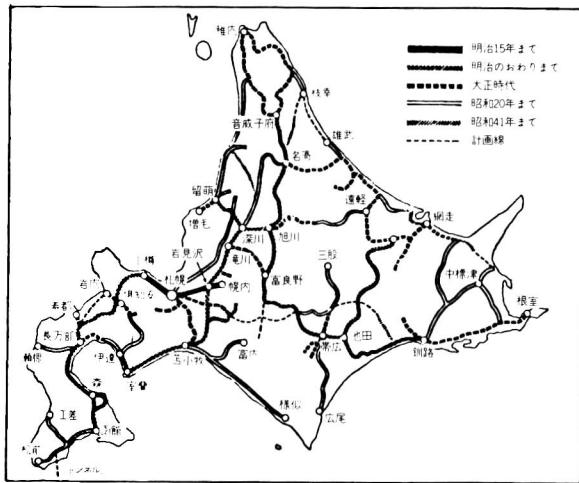


北海道の開拓 (井黒弥太郎「北海道開拓史」による)

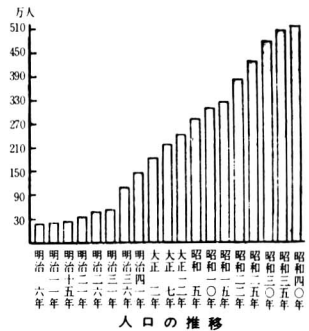
民族を描いた諸家の作品をみると、二十年代までは近代文学前史でも旧派の文学の時代でもあるとともに、近代文学への橋渡しの役割をも果たした。ことばを変えていえば萌芽期であって、それは北海道における明治文学の第一期（前期）なのである。

国木田独歩が北海道に土地を求めて来道したのは明治二十八年（一八九五）のことだが、作家の卯時代であったにしても、北海道移住を熱望した最初の近代作家だった。そしてその作品「牛肉と馬鈴薯」（明34）と「空知川の岸辺」（明35）は北海道の本質を的確に把握するとともに、北海道認識のうえで多大の影響を与えたのである。ことに北方の抒情を確立した「空知川の岸辺」は北海道文学の前奏曲であり、そのこの北海道憧憬の母胎となった。近代日本文学よりワテンポの遅れであったが、ここに近代北海道文学の幕は切って落されたのである。

おおまかに、三十年代を第二期（中期）とみておきたい。この時期が近代北海道文学の始期でも移植期でもあるが、特徴的にいえることは来道作家による放浪文学の比重が高いということである。葛西善藏も石川啄木も岩野泡鳴も長田幹彦もしっかりであって、彼らはこの北海道の風土のなから文学的栄養を吸いあげ、その北海道を舞台にした数々の作品によって文壇的地歩を築く。いずれも彼らの代表作であるとともに日本文学のすぐれた遺産をなしたわけだが、北海道に近代文学の鍬を打ちおろしたのはこれら来道作家たちであった。圧倒的に放浪文学の流れが色濃いのには単なる偶然ではなく、開かれた北方の未知の植民地が彼らを誘ったにほかなるまい。それは徳富蘆花や島崎藤村や武者小路実篤らの旅人たちについてもいえることで、そのことが結果において彼らのその作品が北海道の歴史・



鉄道の発達 榎本守忠・君尹彦著「北海道の歴史」から



人口の推移

	産業別生産高				
	水産	農産	林産	工産	鉱産
明治19	4,540	852			
30	13,998	7,159		3,831	3,538
33	12,391	13,391		5,622	5,544
36	13,408	17,906		6,832	6,138
39	10,369	23,104	5,441	11,704	9,250
42	10,590	23,916	5,658	12,802	8,879

昭和19年4月1日現在人口調査より
『新編北海道史』第7巻統計表より